

本会委員半田康夫氏の逝去

大分大学教授、本会常任委員半田康夫氏は去る八月二十一日午後八時半不帰の客となりました。享年四十九歳。葬儀は二十五日大分市本光寺にて執行。本会では高山、渡辺、立川、の三委員が会を代表して弔問し、香奠を捧げました。別に故人の親友であった富来隆氏は、同家について、葬儀その他一切に亘ってお世話をし、立川委員が会を代表して弔辞を述べられました。故人の御冥福を祈るとともに、右会員諸氏にお知らせします。

半田さんをしのぶ 渡辺 澄夫

半田さんは昭和十八年に静岡師範から大分師範女子部に転任されてきたが、私をはじめお目にかかったのはたしか終戦後、男女両部がいつしよになつた上野の仮校舎であつたような気がする二年も同じ学校にいて知らなかつたわけだが、彼は応召、私は学徒動員で名古屋に行つたりしたとさくさのためであらう。しかし私は前から半田さんの名前は知つていた。それは「秦氏とその氏神」という「歴史地理」誌の論文で宇佐八幡が聖武天皇の大仏造立を助けたといふことから、八幡神は鉾山神で、それは備化人系の秦氏が高度の鉾山（とくに鉾）技術をもつ氏人として奉祀していたものである。という趣旨のものであつた。私はその卓抜な民俗学的方法と着想に、深く印象づけられていたのである。半田さんが大分県に転じたのも、この宇佐研究を完成しようと考えてのことであつたのであらう。

半田さんは東京高師から文理大（教育大）に学び、肥後和男博

士の指導をうけ、民俗学的研究に生涯をかけた。勤務年数二十二年のうち二十一年は本県で過ごされたから、その民俗学的研究もほとんどわが郷土にかなするものが大部分で、県下民俗学界の重鎮としての地位を樹立された。中津の北原芝居や古要神社のくぐつ、全県下の神社祭礼や官宮、神楽などの研究にとくに力をそそぎ、「大分市史」や「県政史」「別府温泉志」「大分県史料民俗編」（以下近刊）や「中津市史」などはその結晶であり、中央の「郷土史辞典」や「文化風土記」「日本民俗学大系」などにも無数の精華が飾られている。

別に三〇年ごろから豊後キリシタン史の研究にもおよび、県下くまなく遺跡、遺物を調査して新発見を加え、その幾つかは県の文化財に指定し、写真集も出版された。なお「大分県の民謡」を採集出版し、数年来は和歌森太郎博士の民俗総合調査に加わり四国、中国方面までかけ回るなど、いよいよ研究は幅広く、油がのつてきた感じであつた。

こうした研究の半面、半田さんは運動好きであるだけに快活でかいぎやくにとみ、飲めばよく講じ、よくうたい、学生のためにもよくみ、みんなからよく慕われていた。さる七月九大病院をたずねたとき、すでに足の肉はげつそり落ちながらも気持ち常人のごとく「早く退院して総合調査の原稿を仕上げねば」と楽しみにしていろいろすだつたが、それもついに永遠に不可能となつた。故人の心情を想うとき、まことに残り多いことがあつたらういたましい限りである。

しかし、あとには嗣子隆夫氏が九大大学院に学びキリシタン史を専攻しているという。故人はおそらく、その遺業をつがせる考へであつたのであらう。地下の半田さんは、あの人なつこい顔で嗣子の成長を見守つてゐることであらう。半田さんの残した業績がいよいよ学界に光り輝き、遺族の方々のご多幸を祈つて拙い筆をおくことにする。